

## ローマ人への手紙15章1-7節 「同じ思いに」

### 1A 他者の重荷 1-3

1B 自分を喜ばせない 1

2B 隣人を喜ばせる 2

3B キリストに倣う 3

### 2A 忍耐と励まし 4-5

1B 希望を持ち続ける 4

2B キリストにふさわしい思い 5

### 3A 神の栄光 6-7

1B 一つ声 6

2B 受け入れ合う 7

## 本文

ローマ人への手紙 15 章を開いてください。私たちのローマ人への手紙は、ついに最後に差しかかっています。午前は、1 節から 7 節まで一節ずつ見ていきます。午後に 8 節以降を一節ずつ見ていきます。

パウロの心の中には、ローマ人への手紙を書くにあたって、一つの重荷があるのだろうということは、初めから感じ取れます。ユダヤ人だけでなく、ギリシア人も信じる者すべてに、救いを与える神の力が福音です。私たちは、それで一人一人が信じて、救いが与えられるということだけに焦点を当てがちですが、実は、「ユダヤ人も、ギリシア人もキリストにあって一つになる」という、大きな恵みについても思いながら書いています。エペソ人への手紙に、異邦人がキリストにあって、神の家族の中に入ったこと、そしてそれが教会であり、また神の国の姿であることを話しています(2 章)。けれども、ローマ人への手紙でも実は同じことをパウロは考えていて、それで、ローマ 9 章から 11 章にかけて、今は福音を拒んでいるユダヤ人が、将来、異邦人の救いが完成した後にイスラエルがみな救われる、という言葉をもって、異邦人がユダヤ人への敬意を忘れてはいけないことを教えています。

そして、12 章に入ってから、もっと教会生活における実践を教えています。そこには、ユダヤ人信者もいれば、異邦人信者もいます。キリストにあって一つになった、というところに立っていれば、そこには平安と喜びがありますが、二つのグループは本当に大きな、文化的な壁があり、実際に共に礼拝を献げるには、克服しなければいけない課題があったのです。それが、14 章にある、信仰の弱い人と強い人之間にある亀裂です。肉を食べてもよいと、信仰によってその自由があるという知識がある人たちもいれば、そうではなく、肉を食べると罪責感を覚える兄弟もいたのです。

ユダヤ人の兄弟たちに、そのような良心の痛みを覚えている人たちが多かったのです。

それで、パウロは、もつれた紐を解くように、この問題を 14 章の中で解きほぐします。問題は、信仰がそれぞれ、神の恵みによって与えられていて、その量りはいろいろあります。そして、主に  
対する確信においては一つであっても、それを具体的なことでは、結果として正反対になることも  
あるのです。私は、例としてキリスト者になってからギターから距離を置いた兄弟がいたことをお話  
しましたが、キリスト者としてギターによって賛美を導き、また伝道する人たちも多いわけです。  
お酒のことも話しましたね。お酒を全く飲んではいけないというわけではないですが、アル中だっ  
た人が、救われて、もう二度と、アルコール飲料を見たくないという兄弟もいるわけです。そういう  
人の前で、自分がお酒を飲んでいたら、そのお酒の問題ではなく、その兄弟の心を傷つけるという  
問題があるのだよ、ということです。

つまり、飲むか飲まないか、食べるか食べないかということが大事なのではなく、自分のしてい  
る行為によって、相手の心を痛めるようなことがあれば、それは、愛ではないということです。自分  
にとっては良いこと、自由なことであっても、そのことがかえって人をつまづかせることになるので  
あれば、避けるべきだということですね。このような考えの流れから 15 章が始まります。

### 1A 他者の重荷 1-3

#### 1B 自分を喜ばせない 1

<sup>1</sup> 私たち力のある者たちは、力のない人たちの弱さを担うべきであり、自分を喜ばせるべきではあ  
りません。

ここでの「**私たち力のある者たち**」というのは、自分が、信仰によって与えられている確信と自由  
がある人々、と言い換えてもいいかもしれません。私は、これを自分に与えられた確信で、だから  
これをしているのだとします。

私は、これだけの時間、祈っているべきだとしているけれども、他の人たちは、それほど祈れな  
ったらどうするでしょうか？我が道を行くということで、自分が祈りに専念すればよいとして、祈って  
いるとします。実際に、牧者チャックが、教会において、こんな対立が起こりました。教会の人々で  
山に行ったのですが、いわゆる霊的な人々は山の上のところまで行って、祈り会をしたいと言いま  
した。けれども、他の人たちは子供たちがいるので、トイレの施設のあるところ、他の多くの一般客  
もいるところにしようということになりました。牧者として、どうすればよいでしょうか？他の一般の  
人々もいるところにしました。

それほど祈りが大事だということであれば、他の兄弟姉妹に心にかけて、その人たちと時間を過  
ごし、祈りの必要を聞いて、祈って行けばよいのです。そして、他の兄弟姉妹たちにも励まして、祈

ることを丹念に教えて行けばよいのです。それが、ここで言っている、「力のない人たちの弱さを担うべき」ということです。自分が神に祈り、神に賛美し、神に熱心に仕えることは大事だとして、それで他の人たちが困っている姿があったとしたら、どうでしょうか？それは、自分自身を喜ばせることであって、愛の律法を全うしていないのです。

ここに出て来る、「担う」という言葉ですが、パウロがガラテヤ書 6 章で書いた言葉に通じます。「6:2 互いの重荷を負い合いなさい。そうすれば、キリストの律法を成就することになります。」ローマ 13 章で、私たちには借りがあって、それは互いに愛することだとありました。自分のことだけでなく、他人のことを顧みます。自分が良かれと思ってしていることで、実は他の人たちに重荷を負わせていることがあります。重荷を負わせるのではなく、自ら相手の重荷を負い、それを互いに行うことによって、初めてそこに神の国があるのです。

こんな話があります。天国と地獄の違いです。自分たちがテーブルに着き、その前には豪勢な食事があります。ところが、箸がとてもしも長いです。地獄では、自分で一生懸命、その箸で食べ物を口に入れようとします。ところが、食べられないままです。天国も同じ条件です。テーブルの上に食事が用意されているのですが、長い箸です。そこで、彼らは、それぞれ向かいにいる人のために、その人の口に、長い箸で食べ物を持っていくのです。互いに助け合います。それで、みんな十分に食べることができ、そこには平和があるということです。互いの重荷を負い合うのです。箸を持っている人が、困っている人の口に食べ物を持っていくのです。自分自身も、困っています。けれども、他の兄弟が助けてくれるのです。

## 2B 隣人を喜ばせる 2

<sup>2</sup>私たちは一人ひとり、霊的な成長のため、益となることを図って隣人を喜ばせるべきです。

自分自身ではなく、隣人を喜ばせることを求めます。「2:4 それぞれ、自分のことだけでなく、ほかの人のことも顧みなさい。」とパウロは、ピリピの人たちに話しました。

ここで間違っははいけないのは、「隣人を喜ばせ」ということが、相手が願っていることを行なうということではないということです。「霊的な成長のため、益となることを図って」とあります。その人がキリストにあって建て上げられること、その人にとって本当に益になることを求めます。ですから、その人が必ずしも願っていることではない、むしろ不快にさせることも時としては必要になるかもしれません。互いに訓戒することもあります。けれども、絶えず相手が霊的に成長すること、益になることを図って、喜ばせるのです。その喜びは、主にある喜びであって、相手の自分勝手な欲求のことではありません。主をもっと知ることができるようになった。この方が身近になった。そこにある喜びです。

### 3B キリストに倣う 3

<sup>3</sup> キリストもご自分を喜ばせることはなさいませんでした。むしろ、「あなたを嘲る者たちの嘲りが、わたしに降りかかった」と書いてあるとおりです。

私たちキリスト教会は、キリストを目指しています。この方は信仰の対象であり、またついていく模範である方です。互いに愛し合うことについて、「わたしがあなたがたを愛したように(ヨハネ 13:34)」と、イエス様が基準となっています。自分を喜ばせなかったことについて、キリストご自身を見てみましょう、ということです。

キリストこそ、「力のある者」の第一人者です。あらゆる特権と力を持っておられる方です。それにも関わらず、主は弱い私たちの弱さを担われて、ご自身を喜ばせることはありませんでした。その力は、弱い人に用いられました。公の働きをされる前に、悪魔から、「神の子であるなら、石をパンに変えなさい」と誘われた時にそれを拒まれ、神殿の頂から落ちることも拒まれ、世界の栄誉と栄華を悪魔から受け取ることも拒まれました。そして、僕の姿を取られて、仕えられたのです。そして、その力を癒やしに、悪霊追い出しに用いられました。イザヤが預言したとおりです、「42:3 傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯芯を消すこともなく、真実をもってさばきを執り行う。」

そして、「むしろ」という接続詞が付いていますが、「それどころか」ということです。ご自身を喜ばせなかったどころか、嘲りさえ受けられたということです。私たちが自分自身のことについて拘っている事柄が、如何に些細なことを知るためです。私たちは、迫害のことについて語っても、目の前にいる兄弟姉妹の重荷を担うことさえできない、ということがあります。目の前の兄弟を愛せないで、どうして敵を愛することを話しているのか？であります。主は、十字架の上で「イスラエルの王なら、神の子なら、十字架から降りてもらおうか。」と嘲りを受けました。イエス様ご自身は、御使いの軍団を呼び寄せることもできる力がおありでしたから、一瞬にしてそこにいるものたちを滅ぼすことはおできになりました。しかし、「ルカ 23:34 父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。」と祈られています。ご自身を救うことではなく、むしろ彼らにとって益になること、つまり今、キリストと神を冒瀆している罪が赦されるように祈られています。

ところでパウロが引用した箇所は、詩篇 69 篇 9 節からです。「それはあなたの家を思う熱心が私を食い尽くしあなたを嘲る者たちの嘲りが私に降りかかったからです。」であります。ダビデが神の宮について、情熱を持っていて、神のことで誹りを受けたのだけれども、これがそのまま、キリストご自身を預言する言葉になっていました。

### 2A 忍耐と励まし 4-5

#### 1B 希望を持ち続ける 4

<sup>4</sup> かつて書かれたものはすべて、私たちが教えるために書かれました。それは、聖書が与える忍耐

と励ましによって、私たちが希望を持ち続けるためです。

私たちは先週、この 4 節を中心にして学びました。今、詩篇の箇所をパウロが引用したので、聖書が私たちに忍耐と励ましについて教えてくれることを話しています。「忍耐」とは、ひたすらに我慢することでは決してありません。今、そうでない状況があっても、将来に確かな希望があるから、それを信じて今を耐える、ということでもあります。そして、「励まし」とは「慰め」とも訳せる言葉です。聖霊が「助け主」と主が呼ばれた言葉と同じです。「そばにるように呼ばれて、援助する」という意味です。私たちが通っている試練について、その同じ試練や苦しみを通ったという人がいれば、私たちは慰められ、励まされるでしょう。

私たちは、今の困難が自分だけのものではないかと思いがちです。けれども、決してそうではないことを旧約の聖徒たちは証言してくれています。ヘブル書 11 章でそれがまとめられています。そして 12 章の始まりに、こう書いてあります。「12:1 こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、一切の重荷とまとわりつく罪を捨てて、自分の前に置かれている競走を、忍耐をもって走り続けようではありませんか。」彼らが、共に信仰の競走を走っていてくれています。「私も同じところを通ったのだよ」と励ましてくれるのです。そして、さらに一歩進むことができるように力づけるのです。

「希望」は、ローマ人への手紙の中でも大きなテーマでした。「5:2 このキリストによって私たちは、信仰によって、今立っているこの恵みに導き入れられました。そして、神の栄光にあずかる望みを喜んでいます。」「5:5 この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」「8:24-25 私たちは、この望みとともに救われたのです。目に見える望みは望みではありません。目で見ているものを、だれが望むでしょうか。25 私たちはまだ見ていないものを望んでいるのですから、忍耐して待ち望みます。」主ご自身が私たちの希望です。主の栄光にまみえることが希望です。そして、将来の神のご計画が希望です。この体も、またこの世界も全てを贖ってください。忍耐を働かせて、励ますことに熱心になり、主が全てを新しくくださることを信じるように促すのです。

## 2B キリストにふさわしい思い 5

<sup>5</sup> どうか、忍耐と励ましの神があなたがたに、キリスト・イエスにふさわしく、互いに同じ思いを抱かせてくださいますように。

「忍耐と励ましの神」が、と、神ご自身が忍耐と励ましを性質として持つておられることをパウロは記しています。私たちが互いに同じ思いになるのは、忍耐によって、そして励ましによって持っているということです。いろいろな違いがあっても、主にあつて忍耐し、また弱い人たちを励ますことによって、そこに美しい御霊の一致があります。「エペ 4:2 謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示

し、愛をもって互いに耐え忍び、3 平和の絆で結ばれて、御霊による一致を熱心に保ちなさい。」愛をもって耐え忍び、相手を見下したり、裁いたりするのではなく、むしろ励まして、そうすることによって、互いに同じ思いになっていくのです。

「キリスト・イエスにふさわしく」とありますが、何をもってキリスト・イエスにふさわしくなのでしょう？ イエス様は祈られました。「ヨハネ 17:21 父よ。あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちのうちにいるようにしてください。あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるようになるためです。」主は、父なる神と一つであられました。それは、父なる神に愛されて、子として父の言われることに従って、その交わりの中で一つとなっておられます。その御父と御子の交わりの中に私たちが招き入れられているのです。ゆえに、キリストにあって私たちが互いに同じ思いを持つようにという祈りになります。

### 3A 神の栄光 6-7

#### 1B 一つ声 6

<sup>6</sup> 6 そうして、あなたがたが心を一つにし、声を合わせて、私たちの主イエス・キリストの父である神をほめたたえますように。

心と思いが一つになっていることによって、それはイエス様の祈りであり、神のみこころなので、神の御名がほめたたえられます。神の栄光を現すのです。

そしてパウロは具体的に、私たちが声を合わせて、神に栄光を帰することを話しています。私たちにある御霊の一致と、賛美を共にするということは切っても切り離せない関係です。互いに私たちが思いを一つにしていなければ、そこにある声には、調和がありません。話を初めに戻しますが、私たちは自分を喜ばせるために歌っているではありません。教会賛美は、自分だけで歌っているようなカラオケではありません。もちろん、聞かせるコンサートのようなものでもありませんが、自分だけで歌うものでもないのです。互いに相手を顧みて、自分ではなく、隣人を喜ばせることによって、初めて歌声の調和が与えられるのです。

#### 2B 受け入れ合う 7

そしてパウロは、14 章からの話のまとめの言葉を語ります。

<sup>7</sup> 7 ですから、神の栄光のために、キリストがあなたがたを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに受け入れ合いなさい。

「信仰の弱い人を受け入れなさい。」から、14 章は始まりました。互いに受け入れます。その理由は、一つは、「神の栄光のために」であります。受け入れることによって、三位一体の神、一つに

なること、父、子、聖霊が交わりにおいて一つであられること、この方の栄光を現わすのです。

次に、「キリストがあなたがたを受け入れてくださった」とあります。イエス様は、悔い改めてご自分に近づく者たちを受け入れられましたね？その人たちがどんな背景を持っていても、受け入れられました。パリサイ人たちが、文句を言いましたね。「ルカ 15:2 この人は罪人たちを受け入れて、一緒に食事をしている」イエス様は、受け入れられたのです。キリストにあって、神は私たちを受け入れたことによって、ご自分の恵みの栄光を現わされました。「エペ 1:5-6 神は、みこころの良しとするところにしたがって、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられました。6 それは、神がその愛する方にあって私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。」私たちが自分の信じていること、やっていることは正しい、だからこの人は自分の考えと違うから受け入れない、としたら、何をしているか分かりますね？神がご自分の栄光を現わすのを、自分自身が前に出て来て、妨げているということです。これだけは、避けたい。

ですから、私たちは、弱い人の弱さを担うことによって、自分ではなく、霊的な成長のために、隣人を喜ばせることによって、忍耐と励ましによって、受け入れるのです。自分のことだけでなく、他者のこと顧みます。自分と意見が異なっても、相手は神から立てられた人、神のしもべだと受け入れて、敬い、尊ぶのです。そのようにして、初めて、私たちは来るべきイエス様への望みをしっかりと抱くことができます。